

「すごい科学者のアカン話」

川崎市立東小倉小学校五年

田島 友揮

たじま

ともき

僕はこの本を読んでアカン人になりたいと思っただ。なぜならこの本に出てくるアカン人は、自分の研究などに夢中になり、どんなことになってもそれを優先し、結果的に人のためになる人達だったからだ。この本に興味を持った理由は、たまに本などで実験を見かけると、僕は母に材料を準備できるかどうかきいてためしており、科学にあこがれているからだ。アカン話というのも、僕は右と左をたまに間違えたり、何かに夢中になると電柱にぶつかると、自分でも、マズイ、アカンと思うことがある。だから親近感がわき、読みたいと思っただ。ジョーン・ハンターの印象的だった。趣味が何と遺体集めと知った時は、それは解剖医学のためで、近代医学の発展に貢献した人だった。遺体集めに反対している人もいた。必要やほこりがあるから研究を持ちなすた。性やほこりがあるから研究をつきつめる必要やほこりがあるから研究を意見も気にせずいられた。授業中などで自分の意見に反対されたら、心が折れたり、ほかの人の意見に合わせてしまいがちだと思っただ。僕の意見は、いくら考えてもそのつづける強さはない。でも僕もいつか自分も夢中になれる専門的な勉強ができたらいなと思っただ。今までの勉強も頑張ってきたけど、それが未来のその土台になると思っただ。気が出てきた。将来どんな自分になっているか分からないが、アカンけど頑張れる自分ならなれる気がする。そう、この本に出てくる科学者達のよう。